

奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民投句
令和元年八月度 入選句 (投稿総数二千二百三十四句・一般投句数五百二十六句)

特選

陰陽の音たがへけり水の秋 養老郡養老町 田中 秀草

世の中のすべては「陰と陽」である。換言すれば「光と影」。そこで生きる人の心には、「陽」は陽の音、「陰」は陰の音が忍び寄る。それは心への呼びかけである。自然からの呼びかけである。生きるということは、そうした「陽と陰」という互いの異なった環境の中を歩むことである。

なぜそこまで「陽」と「陰」にこだわったか、その理由は、中七の「切れ」の「けり」である。「切れ」があるから、そこまで考えてしまうのである。

季語の「水の秋」は、爽やかな秋を一般的には思い起こさせるが、陽から一転して「秋出水」と秋の水にも透명한爽やかさだけではない暗さを持っていることに、はっと気づかされる句である。

夭折の魂や流灯さかのぼる 岐阜市 堀江 美州

夭折とは「年若くして亡くなること」である。「夭折の魂や」は、何を意味するのであろうか。若い人の亡くなったことに、その死者の夢や希望はどこへ行ってしまったのだろうか。「大きな夢」「いくつかの歩む路」があつた若き人。「灯籠流し」の灯が流れに逆らひのぼっていくという二つの内容が、より若き人の死をさらに切なくさせている。作者の心の叫びが届く句である。

夕鴟やまだ献立の決まらずに 不破郡垂井町 中西 弘子

「夕鴟や」は、夕方の鳥は巢へ帰るのである。夕餉の仕度も思い起こされる。「鴟の贄」として一般的に知られているが、今食べるのではなく食料がなくなる頃に食べるために、贄とする鴟。また、鴟の鳴き声はいろいろある。色々な鳥の鳴き声をまねる。いろいろあるがゆえに、決まらない今日の献立。「夕鴟」の季語が生きた俳句である。

それに、俳句は「一句完結」が一般的であるが、最後が「決まらずに」と「に」で余韻を残しているところに、「鴟の贄」が浮かんできた。

秀逸

短冊をはみ出す願ひ星まつり	大垣市	新町	恵子
手探りで生きて一人の夕端居	大垣市	棚橋	昭子
国境見返り地蔵萩揺れる	大垣市	中山	あや子
土用の日うの字跳ねてる暖簾かな	大垣市	傍島	隆
やんはりと話をかはし扇子閉づ	養老郡養老町	田中	紫香
朝焼や真実少し遠くあり	埼玉県所沢市	坂井	傑
商ひは所詮駆け引き夏の陣	三重県四日市市	後藤	允孝
仏壇に汚れた手帳終戦忌	大垣市	高橋	柳邦
へラ浮子が気に入つたらし糸蜻蛉	京都府京都市	石田	吉之助
普段より濃き焼酎や妻の留守	広島県福山市	中常	かつらう一。

入選

うす紙のやうな昼月青田かぜ
 水底に藻の照りわたる梅雨の明
 厳島祭りの火の粉清浄なり
 存問の旧家の風情夏つばき
 古書店主ねがねずり落ち秋暑し
 黒南風や塗りかえらるる海の色
 青田風入れ単線の一輛車
 風鈴や糺の森に湧きし恋
 鈍色の刃文のうねり梅雨深し
 晩鐘を聴き入る夕焼地に長し

大垣市
大垣市
不破郡垂井町
不破郡垂井町
安八郡輪之内町
大垣市
大垣市
岐阜市
羽島郡笠松町
不破郡垂井町

坪井 克枝
神野 武彦
傍島 法苑
清水 るり
野村 照子
岩永 フチ子
森川 きよ子
伊藤 瑞実
易田 喜芳子
児玉 信子

入選

滴りのリズムはサンバ森の奥
 あの空へ続く道あり山開
 供花を手に二百段目の汗しぼる
 古文書に眠りし紙魚の飛び起きる
 夕焼空信号待ちの郵便車
 太陽の爆発ちかしソーダ水
 カブト虫われ少年となれるとき
 角皿の北枕なる夫婦鮎
 京言葉そつと檜扇広ごりぬ
 炎昼や音の途切れぬ警報機

大垣市
岐阜市
福井県敦賀市
大垣市
大垣市
養老郡養老町
長野県下伊那
安八郡安八町
大阪府大阪市
神奈川県横浜市

宮上 美濃留
花川 和久
山田 美千代
澤井 国造
大杉 すみゑ
松永 智志
長沼 まさし
牧村 みどり
梅田 清麗
龍野 ひろし

選者吟

長き夜に古き映画の美男美女

永山